

■ 人間関係研究へのアプローチ

教育の新たな冒険

—ホリスティック・ヒューマン・トリニティーへ向かって—

グラバア 俊子
(人文学部心理人間学科教授)



大きな歴史の節目を迎え、時の大河が逆巻き21世紀へと落下するように流れ込む今、一つのイメージが鮮明に浮かぶ。何年か前に訪れた世界最大の滝、イグアスである。

ブラジルからアルゼンチン側へまわり、川の上に設けられた遊歩道を歩いて行くと、“悪魔ののどぶえ”と呼ばれる最も落差の大きい大滝の展望台に出る。遊歩道までのボートでは、川の流れを特に速いとも感じない。日本の川より広やかにゆったりと流れて行く。その油断が見る者の息を奪う。無意識の中に轟いていた水音さえ消えて、毎秒3万 m^3 の褐色の水が、ただ自分の足元から滑らかに落下して行く。その静けさの先には、すさまじい混沌が叫びを上げ、叫びは水煙となり、落下を始めた地点より遥かに高く立ちのぼり、そして、大地の亀裂のその上に、きらきらと透明な虹を架けていた。

「最も深い落下から、最も高い希望が生まれる」。これが、イグアスの滝か

ら受け取ったメッセージである。時代そして私個人は、一体今どこにいるのであろうか。落下を内包した穏やかな褐色の流れ、あまりに静かな落下、咆哮する混沌、大地のエレメントを抜き去った透明な上昇。それらすべてが同時に存在する1つのイメージ。

南山短期大学人間関係科から、南山大学心理人間学科へ。南山短期大学人間関係センターから、南山大学人間関係センターへ。28年に渡ってかかわってきた、教育の冒険の場が場所を移すことになった今、残された限りある時間を何のためにどのように用いるのか吟味し直すことは、意味があり必要なことと思われる。そのためにはイグアスのイメージの助けを借り、大きな変化が生み出した流れに身を任せ、今までに創り上げてきた思考の枠組や自己概念を滝壺の混沌の中にほうり込み、そこから立ちのぼる水煙と乱気流で余分なものを削ぎ落とし洗い流し、残ったものを見てみたいと思った。

それは教育、研究に携わる者としての原点を確認することでもあった。遅々として進まぬ行程であったが、たどり着いた先はどちらも大学紛争に揺れる大学時代であった。

I 教育と研究の原点

1、教育に関する私の出発点—人間不在の教育から人間性の回復へ

第2次世界大戦終戦にともなうベビーブームで生まれた団塊の世代は、戦後の日本社会の大きな変動の波をくぐってきた訳であるが、その一つが高等教育のマスプロ化であった。エリート教育を前提とし権威構造を強く残した大学教育が、戦後の民主主義教育と大学進学者数の急増（昭和30/1955年13万人、昭和40/1965年25万人）に対応できないのは当然のことであった。そうした矛盾や軋轢が形となって噴出したのが、1968年前後に日本の多くの大学で火を噴いた大学紛争である。当時比較的少人数で学部生・院生・教授の交流の多い科にいたこともあり、関心領域の違いや視野の狭さと未熟さにより、学ぶうえでの様々な不満は感じたものの、それは単に個人的に対処するべきものと考えていた。しかし、仏文科の人事問題から始まった文共闘運動により大学はロックアウトされ、1969年から卒業の1970年まで授業らしい授業は行われず、必修だった卒論も書くか書かないかは自由という異常事態の中で、大学のカリキュラムや教育組織としての問題点、そして大学教育そのものについて考えさせられたのである。

未完で提出した卒論の序論で、卒論ということを通して大学教育の問題点に関する考察を次のように述べている。

それでは、一体私にとって現在の卒論の何が不満で、カリキュラムのどこが問題なのであろうか。カリキュラムの問題は、ある意味では今日の大学問題の本質的部

分であり、多面的で複雑である。その問題全てを概観することは今の私にはできそうにない。しかし、次のようなことは指摘できるのではなからうか。

知識を得る、与えるということが形式化、形骸化してしまっている。つまり知識が実質的にその人の中に血肉化したかということは、個人の努力・能力の問題であり、教授そしてカリキュラムの問題ではないのである。これは教育理論、教育方法論とかいう以前の段階における現実であり、ここにどのような創造的教育論が潜み動き出そうとしているのかは別として、あまりにも茫漠として、自己完結的な知識の輪がぼつんぼつんと散在する砂漠にも似ている。我々は渇いた旅人であり、あちらの輪からこちらの輪へと次々に、あてもなく我がオアシスを求めてさまよう。ある者は探し当て、ある者は疲れ果て尋ねることも忘れてさらさら砂に埋もれて行く。

卒論に関して云うなら、プロセスの欠落、それもテーマ決定までのプロセスの欠落である。それは、テーマを決めるまでに時間を充分かけ、教授にもよく相談し、自分も良く考えましたか？などという次元の問題ではない。まさにカリキュラムの次元の問題なのである。今、四年次における Integration Course 又は、合同演習などということが言われているが、こういう事が必要とされている背景と卒論におけるプロセスの意味とは深い関係があるのである。

我々が大学で学ぼうとしていることは、問題を突きとめ、学問を通してそれを解決する力を養う事である、という言い方が可能ではなからうか。我々の生の営みとは広い意味において、問題と解決の繰り返しではないか。我々はそういう生きた者として大学のカリキュラムとかかわるのである。しかし、カリキュラムにとって我々は過ぎ行く者にすぎない、(ということは教授も同じ運命だということなのだが)。我々がそこに見いだすのは何か、色どり豊かな目くらむばかりの知識の山々。言ってみれば、我々を圧する量の情報である。そして我々には情報処理システムがかけられている。我々のカリキュラムには、得た知識を、integrate して行く場が決定的に欠けているのである。 — 中略 — 違った言い方をすれば、四年間自分の問題を常に integrate しながら学んで行けば、卒業という断面に表れたものが自然卒論ということになるであろう。当然それは、卒論のための卒論になれるはずはなく、過去と未来との緊張の上に立つ、今、現在の私にかかわるものである。又逆に言えば、四年間を通じた integration なしには、一般的な意味での卒論は書いても、私の卒論は書けないのである。」(「関係」についての一考察 藤岡俊子)

大学紛争において多くの大学で学生が提起した基本的な要求は、大学教育の改善であった。当時の社会状況を表すものとして「人間疎外」という言葉が、さまざまな場面で用いられていた。無名性の中に埋もれ、個としての主体性が失われ、周囲の環境や人々との関係性を喪失し、孤独になる状態である。大学においても非民主的なシステムやマスプロ教育の中で、教員と学生そして学生と学生の間が寸断され、人間疎外の状況を呈していたとも言えよう。

2、研究の出発点—言葉と自己の乖離

大学時代の通奏低音は「言葉」であったと言えよう。高校までは論理や言葉を楽しんできたのであるが、大学では言葉の限界性を突き付けられることになったのである。

言葉への不信、疑いは、私にとって大学時代の基調色のようなものである。頭で行動せず、心で行動しよう、ということが四年の間に知らず知らずモットーになってしまった。まだ大学に入りたての五月、友人と神について議論（形だけは議論だったが）したのだが、その時の虚しさの中で、思いと考えが私の中で違うことに気づかされた。自分の中での思いと語ること、行うこと、その間の裂け目は生活を通してさまざまなかたちをとっていった。「私は時たま筋のおった完璧な言葉というものを疑ってしまう。特に人間とか存在とか神とかについて、あまり筋がおっていると、本当とは思えない。私にとって、それらのものは、よく説明されえがゆえに真理とはならない。」「みんなは言う、伝えるには言葉が必要だと。たしかにそうであろう。言葉なしに一体何が伝えられるのか。だが、私が伝えると言う時、何を伝えようとしているのか。たしかに知識は言葉で伝え得る。しかし、私の伝えようとしているものは、そうだ、多分私そのもの、私という存在なのだ。しかもそれは、私が何を考えているのか、どんなに人生観を持っているのかということではなく、あなたに対して私がいる。その存在の事実なのである。」そのようなことを言っているようでは大学にいる資格がないとも言われたこともあった。

ヘルマン・ヘッセが「内面への道」の中で語っている。「世界を解釈し説明することではなく、世界と自分を軽蔑せず、憎まず、世界を愛することができること、愛と賛嘆と畏敬を持って一切を見ることができると、それこそ、自分にとっては肝要事だ。」¹ 又、「私は一つの思想を見出した。それはあらゆる真理について、その反対も同様に真実だということだ。つまり一つの真理は常に、一面である場合にだけ、表現され言葉に包まれるのだ。思想でもって考えられ、ことばでもって言われ得ることは、すべて一面的で半分だ。すべては全体を欠き、まとまりを欠き、統一を欠いている。しかし、教えようと欲するものにとっては、ほかに道はないのだ。だが世界そのものは、我々の周囲と内部に存在するものは決して一面的ではない。」²

私はここで、言葉の限界に耐えて出発しようとしているのであろうか。まだ解らない。(前掲論文)

道具としての、また時には武器としての言葉ではなく、自分自身の存在を開き示し、時には差し出すこととして語るとはどういうことなのか、またそれをどのように探したらよいのかさえ分からなかった。

1 高橋健二「ヘッセ研究」ヘッセ全集別巻（東京、新潮社、1957年）p.170

2 ヘルマン・ヘッセ「内面への道」新潮文庫（東京、新潮社、S46年）p.143

3、教育と研究に関する私の原点

一年余りの混沌とした時期は、私個人にも少なからぬ影響を与え、大学院進学という思わぬ方向に進むことになった。人間そして、その可能性に興味があるというところからスタートした大学での勉学であったが、それは青年期の自己探求への関心でもあった。それが、1,2で述べているような新たな問題を体験を通して突きつけられ、自己という出発点から、言葉＝関係性そしてそれまでほとんど興味のなかった教育へと、関心領域が広がっていったのである。

どこに糸口があるのか判らぬまま、模索の場として進学した大学院であるが、1年次の夏に初めて人間関係トレーニングに出会った。これは感受性訓練、Tグループ・トレーニングなどとも呼ばれており、文共闘の問いかけを受け止めた立教大学文学部の、カリキュラム改革の一つとして試行された5泊6日の学外集中授業であった。このトレーニングは、元々1958年世界教会教育大会が開催された際、牧会トレーニングとして初めて日本で行われたものである。その後教会生活指導者研修会として、大学時代からの指導教員であった柳原光教授が所長を勤める、立教大学キリスト教教育研究所（JICE）が引継ぎ、エキメニカルな活動を展開させていた。大学のカリキュラムの一環として行われたのは、おそらく世界でも初めてのことではなかろうか。この6日間で、言葉以外のコミュニケーションの手段としての非言語コミュニケーションとの出会い、自己の感情への気づき、そして自分自身を他者からのフィードバックを通して知るという全く新しい体験をした。「ああ、人はこのように関わることができ、このように成長できるのか」という深い喜びに満ちた思いであり、それはまさに言語の限界性を突破し、私という一個の人間の存在を受け止める教育の可能性を開いてくれたのである。

また広く企業、自治体、医療、教育といった分野の人々が参加するようになっていた、立教大学キリスト教教育研究所の人間関係トレーニングに、聖母カテキスタ会の会員が参加するようになったことがきっかけとなり、南山短期大学に人間関係科が設立されることとなった。JICEでのトレーニングに関わりながらそこをフィールドとした研究、そして新たに設立された人間関係科での新しいカリキュラムの模索と実践、日本での教育体験から培った教育に対する枠をはずすための米国（ボストン大学・教育学部）への留学、ヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントの中心地であったエサレン研究所での研修。こうしたことを通して次のような点が、私の教育と研究の原点として明確になってきたと言えるであろう。

*教育（カリキュラム）について

1、学生一人ひとりの自己成長を組み込んだ教育プログラムの必要性。

（教育方法としての体験学習の確立と発展。自己理解・自己成長の場となる授業の開発）

2、個別の科目だけでなく、科全体として学生の自己成長のニーズに対応した、有機的で柔軟なカリキュラムの必要性。

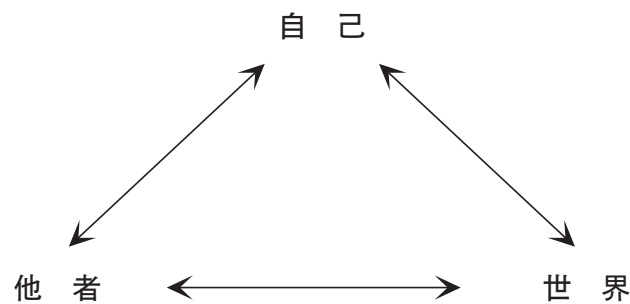
(チーム・ティーチングなども含めた、教員チームの重要性)

3、自己成長の手がかりとして、5つのライフ・スキルに関するスキル・トレーニングの必要性³

(Thinking, Feeling, Communicating, Choosing, Acting)

4、自己成長の前提としての関係理解の重要性

(自己－他者－世界の相互影響関係という視点の重要性)



ここで目指す自己成長は、常に他者と世界との相互影響関係の中で捉えられている。つまり、単に学生一人ひとりが成長すればよいということではない。自己が変わることにより、他者との関係が変わり他者にも影響を及ぼす。また他者の集まりである集団や組織が変われば、個人にも社会にも影響があるというものである。また世界に関しては、社会制度や文化だけでなく、自然環境も重要な要素として見過ごされてはならない。三者が相互影響関係にあるということは、構造的にはあまりに当たり前のことだが、人間関係科で「チェンジエージェント」という言葉が大切にされていたことに示されるように、大きな問題であっても自分が変わることによって影響を与えることができるという発想であり、自分にできることを探して行動するという、問題解決能力の重視である。

* 研究テーマについて

1、非言語コミュニケーション

(からだの語る言葉と、その特質に関する研究)

2、自己成長の手がかりとしてのからだ

(自己の象徴としてのからだ、という仮説に基づく研究)

大学にとって、ロックアウトそして一年に渡る休講という状況は、急激な落下であった。そしてそこには、内側からの教育改革への熱い水煙が立ち昇ったのも確かである。しかし、落下はまだ滝壺の底をえぐっていないように見える。

3 「体験学習 (Experiential learning) - その2 - 個人成長 (Personal Growth) の手がかりとしての五つのライフスキル」参照 南山短期大学紀要第10号 S57年

II 今後の課題と方向性

－ホリスティック・ヒューマン・トリニティーへ向かって－

教育に関しても研究に関しても、どちらも自分の体験から生じた問いの答えを探そうというもので、確立された方法論があったわけではなく暗中模索であった。幸運なことに、南山短期大学人間関係科という、体験学習を高等教育において試みるという教育の冒険の場にいたおかげで、私にとって教育の実践が常に研究のフィールドであった。そして私より確実に未来を生きている学生たちの関心と感性が、私の研究の指針でもあった。

他の教員との人間関係科における28年間の教育実践で、私の教育カリキュラムに関する問いはほぼ答えられたといえよう。それに加えて、二年間という短い間ではあるが、学生一人ひとりがそれなりに自己の可能性を見出し開花させ、そうした自己を他者に向かって開示していくことは、互いに他者を一つの世界として受容することの学びとなった。また違っていることを豊かなこととして、楽しむ関わりを生み出した。このことは、自己－他者－世界の相互影響関係の表われでもあり、大きくいえば世界平和といった複雑で、しかも緊急度の高い問題への一つのステップと言えよう。

研究に関して言えば、非言語コミュニケーションから始まり、からだに注目しボディワークという分野を教育に取り入れてきたのであるが、これも教育における自己成長とは何か、また自己成長を促進する教育プログラムとはどのようなものかという関心に基づいている。教育プログラムの中で自己成長を語る時、その方向とゴールは学生一人ひとりが定めることが前提となる。何に向かって、どう成長したいかを見いだす手助けが教育者の役割といえよう。そうした観点に立ち、学生が成長の方向とゴールを自分自身で選択していく手がかりとして、次の二つの研究テーマに今後とも取り組んでいきたい。

1、歴史的視点の提供

自己成長の方向やゴールの探求は、個人の内的欲求と深く結びついた個人的な課題である。しかし、20世紀に生まれ育ち21世紀に生きる人間としての課題から逃れることはできないであろう。自分が今、歴史の中でどのような流れのどこに立っているか確認することは、方向を定めるための重要なデータであろう。

主に三つの視点について考えてきた。

- a, 教育学と心理学におけるヒューマニスティック・アプローチの台頭
20世紀に生まれた用語「自己実現」をめぐって、A.マズローを中心に。
- b, ライフ・スタイルの変化⁴
P. ナッシュの、20世紀米国における生存指向 (Survival oriented life

style) から成長指向 (Growth oriented life style) という捉え方を発展させ、今後の方向性として、いのち指向 (Life oriented life style) を提唱している。

- 生存指向 — (物質的な豊かさを求める動き
 (キイワード — 生産
- 成長指向 — (人間的な豊かさを求める動き
 (キイワード — 人間尊重

上記のように捉えたとき、成長指向は物質的豊かさに支えられて形成されたと言えよう。現在もこの二つの流れは拮抗しながらもバランスを求めて、誰も知らない未来に向かって轟々と流れている。しかし20世紀に生まれたもう一つの用語「公害」、そして環境破壊、温暖化などという言葉に示される、二つの流れを根本から覆しかねない状況が年々深刻になっている。地球の生態系に依存している、ホモ・サピエンスとしての生存を目指した新しいライフ・スタイルの醸成が必要であろう。そこでキイになるのは、①今まで社会的に充分活用されてこなかった、いのちを育む性としての女性の感性が捉えたもの、②未来を生きる若い人たちの感性が捉えたもの、だと考えている。

c, 人間の五つの文化期

R. シュタイナーによる人間の意識の変化。約二千年を一区切りとした独自の視点からの捉え方であるが、簡単に触れてみる。

第四文化期 — この頃になると論理的思考が可能になる。抽象的に物事を考え、納得した上で問題解決をしていくことができるようになるが、依然として外的な一つの指導原理のもとで秩序を維持していくという在り方をとる。したがって本質的には、集合的で全体主義的で個性を肯定しない態度をとる。封建制度はその代表的なかたちである。

第五文化期 — 15世紀に入ると、一人ひとりが一切の外的権威から自由になって試行錯誤し、失敗しながらも個人が自己の内的必然性に従って生きていく時代になる。現代はまだ第四文化期を色濃く引きずっており、特に医療や教育制度はその傾向が強い。個的な意識をより強くもって生まれてくる子どもたちが自分の内的必然と、権威による制度の軋轢に苦しんでいる現状がある。

このような a、b、c という視点を中心に取り組んできたが、より包括的でグローバルな視点を得るためには、人類の起源、生命の起源、宇宙の起源といっ

4 「第二の大航海時代の生涯学習」南山短期大学人間関係研究センター紀要 参照「人間関係」第8号 H3年

たことも視野に入れざるを得ないであろう。手に余る課題ではあるが、今後出来る限り最新の遺伝子や進化論などの生命科学、物理学などから得られた知識を取り入れていきたい。

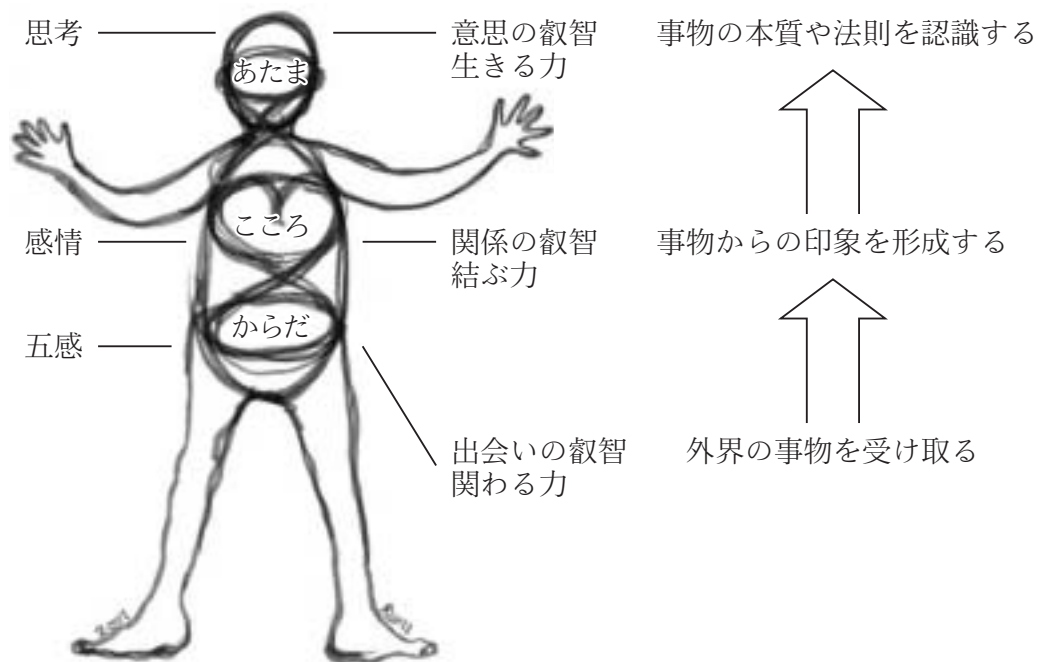
2、自己成長のモデルの提示 — ホリスティック・ヒューマン・トリニティー

自己成長のモデルの一つとして、ホリスティック・ヒューマン・トリニティーと名付けたモデルを提示したい。

自己成長の手がかりとして、生きて動きかかわるからだを研究するうちに、非言語コミュニケーションのベースである非言語表出だけでなく、からだのもう一つの要素である五感の重要性に着目するようになった。自己が他者と世界との相互影響関係の中に存在するという構図を先に述べたが、自己が他者や世界と出会い、その存在を認識するのは五感を通してである。これは自明の理であるが、現実には環境や社会の変化に伴って五感の用い方に大きな偏りが生じ、五感異常と呼ばれる状況さえ起きていることに驚かされたのである。

人間としての成長と成熟そして健康を考えると、感性と理性の統合、心とからだの相関関係、サイコソマティック・アプローチといった全人性に向かった視点が従来も語られてきた。ここで提示しようとしているものは、ボディワークの授業実践を通して得られたデータを基に、頭と心とからだという三者の関係性を包含した、全人的な有機的モデルである。⁵

a、人間の三つの叡智（頭の叡智 — 心の叡智 — からだの叡智）



私たちは叡智は頭脳に存在するものと考え、ほとんどの場合、教育といえば知性、学力、思考力を養う知育というのが自然の発想のように思われる。従来

の学校教育においても、知識の習得、知的思考のトレーニングに重点が置かれていた。体育に関しても、新しい動きがみられるが、身体の健全育成、運動能力の発達、保健知識の理解などが目的とされてきた。多くの場合、感情に関してはむしろ排除されてきたといえよう。

このホリスティック・ヒューマン・トリニティーというモデルでは、まず五感を用いて他者や外界の事物に関わることによって、感情が刺激され動き出す。自分とのつながりの中で、自分と関係のあるものになったとき心が動き出すわけである。すると対象に対して理解したり、働きかけたりする欲求が生まれる。そして、それらを実現するには人類が積み重ねてきた叡智、知的情報が必要になってくるという流れである。図からいうと下から上に向かう流れが大切であり、知識は当然重要であるが、この流れを無視した知識詰め込み型の教育は、人や物に関心を示し関わり合うという力を充分育てることができないと思われる。

図にあるように、からだの叡智は人や外界のものや出来事とかかわる力を与える、出会いの叡智である。心の叡智は、関わった対象と自分を関連づけて捉える力、自分と対象を結ぶ力を与える関係の叡智といえよう。そして、このように五感を用い感情が動いた時に、思考が自分がしたいこと、対象に対してしてあげたいことを実現するにはどうしたらよいか、考えをめぐらしていくことになる。そうした時にはじめて、思考が自分の思いを実現していく、つまり生きていく力としての、意思の叡智になる。頭が心とからだから切り離されて、そこにいろいろな情報だけ入ってきた場合は、頭は単なる情報処理を担うコンピューターになってしまうであろう。

からだの叡智と心の叡智は、一人ひとりのユニークさから成り立っている叡智といえよう。しかし、それはともすればその個人の今までの経験という枠に、囚われてしまう危険性もはらんでいる。五感によって動き出したからだの叡智と、感情によって色彩られた心の叡智が自分とのかかわりに編み込まれ、その経験の本質や法則が、思考によって認識された時、自己を個から普遍へと解き放つことが可能になるのであろう。このような関連性の中で頭の叡智が働いた時に、からだの叡智と心の叡智から生まれた流れの方向付けをし、実際に行為に移す力、生きる力として意思が生まれるというモデルなのである。

b、五感の教育 — まずからだから始める

視聴覚メディアの発達、都市化、食文化の変化などの広範な社会環境の変化にとともない、五感の用い方の偏りが生じ、私たちに備わっている情報収集器官

5 「新・ボディワークのすすめ — からだの叡智が語る 私・いのち・未来」(大阪、創元社 2000年) 第四部未来を切り拓く私たちのからだ — 五感の教育・・・いのち編 参照

である五感すべてを用いて、直接情報を集めることは非常に少なくなっているように見える。また、五感そのものの変調という問題もおきている。奇妙なことだが、これだけ現実に関する情報量が増えたにもかかわらず、現実との接触は限られ偏ったものになっている。人と物とが織りなす現実の世界から、直接自分で情報を引き出す力が弱くなっているといえよう。

ボディワークを通して分かってきたことは、①五感が提供する情報量の幅広く豊かであること、②五つの感覚のそれぞれがキャッチする情報の質が違うということである。からだに関わってくると、人間のからだに備わっているもので不必要なものは何もない、ということを実感させられる。感覚器官が一つではなく、複数あることにも意味があるのだと納得させられる。③人間は外部からの情報を判断して行動を起こすわけであるが、五感の使い方が偏ると情報の質が偏るわけで、その個人の行動に影響を及ぼすと考えられる。自分の中の優位な感覚のもつ特徴が思考や行動の基準になり、自分の性格や行動特性と思っていたものの一部は、五感の使い方の偏りと深い関わりがあり、自分がよく使う感覚からくるデータに影響された、行動パターンの傾向ということが考えられる。

自己成長という非常に掴みにくい抽象的なことも、具体的には自分の五感を十分に用いるという所から始めることができるであろう。またボディワークからいえば、広い視野を持つという抽象的な事柄も、実際に顔をあげて視線を上げる、前後左右上下さまざまな角度から見る、俯瞰できる場所に行く、見回す、違った方向から見るなど具体的なアプローチが可能である。

また、私たちにとって自分の感覚体験というものはあまりに当たり前で、それを吟味しようという気持ちさえ起こらない。それは他者も自分と同じ体験をしているという無意識の思い込みになり、コミュニケーションを困難にする大きな要因になる。五感を深く理解すればするほど、一人ひとりが違った世界を体験しているということが明確になる。違って当たり前だからこそコミュニケーションをとる必要があると考えることは、自己、他者そして人間関係を考える基本的な枠組みの転換を促すであろう。

c、感情の教育 — 他者や世界との関係をキャッチするアンテナを磨く

最近の傾向として、学生だけでなく社会人の人間関係トレーニングの場で、コミュニケーションの課題として「感情の取り扱い」を挙げる人が多くなってきた。これからますます必要とされる領域であろう。そこでは、感情の意味や感情が何をもたらすかという理解、自己の感情への気づき、感情表現の方法などが取り扱われるであろう。

ここでは簡単に、J・L・ウォレンが感情の建設的な役立て方として指摘している点を挙げておく。

①感情を無視することでコントロールはできない。逆に感情に自分を支配させ

ることになってしまう。

- ②感情は個人や世界やその関連性について、大切な知識を教えてくれる。
- ③感情は人間関係の中でヒューズの役割をはたす。つまり、人間関係の中で、つながりが壊れる前にイライラしたり、取り返しがつかない程離れてしまう前に憤慨する。人とのかかわりや状況が自分にとってどういうものか、感情がサインを送ってくれる。そして、そのサインをキャッチできれば、修復可能なうちに問題の存在に気づくことができる。

また彼は感情表現の三つの方法を提示している。

- ①直接表現 — ズケズケ、歯に衣を着せずに言う。
- ②間接表現 — 間接的、遠回しな表現。自分の感情から相手に焦点が移っている。発言者の判断が入り、多くの場合評価的になる。
- ③直接報告 — 自分の感じたことを率直かつ素直に他人に知らせる。決して高圧的でない。

自分の感情に気づくことや感情表現は、実際のトレーニングが必要とされる。これからの課題として、学生たちの感性をアンテナとして、新しい実習や感情の教育のカリキュラムを開発していきたい。

からだの叡智と心の叡智、五感と感情が生き生きと動き出すと、人の中に、物の中に、自然の中に美しいものをたくさん発見するようになる。美しいと感じることは喜びを生み出し、人、物、そして自然を善きものと感じることへ繋がる。それは、世界そして他のいのちに対して畏敬の念を呼び起こすエネルギーでもある。

Ⅲ 20世紀の落下と21世紀の虹

こうして振り返ってみると、日本の教育状況の中で果たして大学紛争の問うたものは実現されているのか、自分の学生時代とどのように違っているのか、という疑問が湧き起こってくる。かえって初等、中等教育の混迷は深まっているように見える。これからの課題は28年間の教育の冒険の成果を、いかに新しいフィールドに広げ活かしていけるかということになる。学生の感性を指針に、新たな教育の冒険はまだ始まったばかりである。

個人的なことであるが、私の夢は芸術家のパトロンになることであった。機会と資金に恵まれない才能を、自分の嗅覚と鑑識眼で掘り起こし、育て、開花させ、この世界に新たな美を持たらすこと。お金に縁がない私にはまさに夢、実現不能とあきらめていた。しかし、この稿を書き進めていくうちに、教育にたずさわることはこの夢を実現していることと気づいた。その人の中に確かに存在する、まだ開発されていない可能性を探し出し、育むこと。一人ひとり違

う、その人独自の感性を磨くお手伝いをする。これはまさに、この世界に美を発現させることではなかろうか。これからは、一人ひとりの魂の色が輝きだし、それらが出会い織りなす色彩の美を、祈りと共に喜び楽しんでいきたい。

戦争の世紀であった20世紀。環境破壊の世紀であった20世紀。その深い深い落下に、どんな色の虹が未来にむかって架かるであろうか。

最も深い落下から、最も高い希望が生まれる。

